

関東以西の水田での問題雑草

ホソバヒメミソハギ

協友アグリ株式会社 普及営業部
徐 錫元

近年、ダイズ畑では帰化アサガオ類等が、また、ムギ畑ではネズミムギやカラスムギ（浅井 2015; 清水ら 2001）が問題となりその防除に苦慮している。一方、水田でも熊本県等の九州地方ではナガボノウルシ、関東以西ではヒレタゴボウやホソバヒメミソハギ (*Ammannia coccinea* Rottb.) 等が問題となっている（浅井 2015; 森田ら 1992; 徐 2017, 2018; 清水ら 2001）。これらは、海外からの飼料・藁等の輸入に際して混入してきたものと考えられる。

その中、ホソバヒメミソハギはミソハギ科ヒメミソハギ属の熱帯アメリカ原産の一年生草本で、南北アメリカ、北アフリカ、南ヨーロッパ、アジアの熱帯から温帯にかけて帰化している（浅井 2015; 清水ら 2001）。日本では 1952 年に長崎県佐世保市で見いだされ、現在では関東以西の水田・休耕田・沼地に広がっている。同科同属の雑草としては、在来種のヒメミソハギや、北アメリカ原産で 1968 年に鹿児島県で確認された後、西日本に広がったナンゴクヒメミソハギがある。また、同科キカシグサ属にはキカシグサがある。

形態的特徴

草高は 50cm から 100cm。葉はやや革質、細い披針形で無柄、長さ 3～8cm、幅は 0.4～1cm、基部は耳状で断面の四角い茎に交互に対生する（清水ら 2001, 図-1,2）。上から見ると、十字形に見える。水中の茎下部は白い。夏期に葉腋から出た花序柄（0～2mm）に淡紫色の 4 弁花を数個つける。類似種のヒメミソハギは、花弁は 4 枚、赤紫でごく小さく、また、ナンゴクヒメミソハギは花序柄（3～10mm）が長い点等から種の区別がつく。これらの形態的な違いについては早川ら（2018）や森田ら（1992）の詳細な報告がある。

水田での発生と雑草害

ホソバヒメミソハギは、十分な湛水下では発生はほとんど見られないが、田面が露出する中干頃から見られる。また、同一圃場でも耕起・代掻きが不十分で田面が高くなった部分や畦畔際で発生してくる。この傾向は、同様に問題となっているヒレタゴボウ、ナガボノウルシ、さらにはクサネム等でも見られ、圃場によっては、これらと混在している（図-2 左）。また、三重県松阪市の 8 月中旬収穫の早期栽培圃場では稲

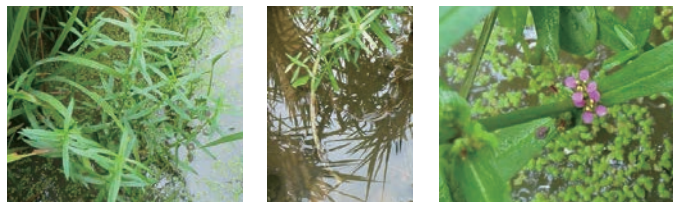


図-1 ホソバヒメミソハギの成植物（左）、茎下部（中）および花（右）
注）岡山市，2015年9月上旬



図-2 黄色花のヒレタゴボウと混在するホソバヒメミソハギ（左）と稲刈り後に発生したホソバヒメミソハギ（右）
注）左：岡山市，2018年9月上旬，
右：三重県松阪市，2018年10月中旬

刈り後に発生し、10月中旬頃の観察では草高が 10cm に満たないものでも着蕾・開花している（図-2 右）。西日本では、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）による被害が深刻な問題になっている。この防除に浅水管理を行うため田面が露出しやすくなる点も、その多発の一因と考えられる。多発した場合、減収被害だけでなく、茎が太く硬いためにコンバインの故障原因ともなる。

防除

ホソバヒメミソハギに対する除草剤の効果は、薬剤や散布時期によっても異なるので（協友アグリ 2017; 伊藤 2018）、本種が問題となる地域では事前に、使用薬剤が適正であることを確認しておく必要がある。また、本種には SU 抵抗性バイオタイプが報告されている。防除は基本的にはこれに活性のある初期剤や一発剤を使用するが、中干頃から発生するため一発剤だけでは防除できないこともあり、ペンタゾン等の中・後期剤の散布、更には手取り除草が必要となってくる。手取りしたものは、種子が圃場内や畦畔に落下しないように、圃場周辺外に持ち出すことも重要である。

参考文献

- 浅井元朗 2015. 「雑草大鑑」. 全国農村教育協会, 東京, pp.17-336.
- 早川宗志ら 2018. 徳島県博物館研究報告 28,7-10.
- 伊藤雅仁 2018. 雑草と作物の制御 13,41-45
- 協友アグリ株式会社 2015. ピラクロニル NEWS7.
- 森田弘彦ら 1992. 雑草研究 37,74-77.
- 徐 錫元 2017. 植調 51(8), 29.
- 徐 錫元 2018. 植調 51(11), 6.
- 清水矩宏ら 2001. 「日本帰化植物写真図鑑」. 全国農村教育協会, 東京, pp.9-448.